

## ベレニセに捧げる詩<sup>①</sup>

オルガ・オロスコ  
三角 明子 訳

### I

偶然が宿命のもつとも一徹なゲームだとしたら

わたしたちはいつかその血統の伴走者に正当に尋ねることが出来るかもしれない

かれらはよるべないおまえから亡命者のわたしへと橋を架け

その後突然、めぐりあわせの回路を閉じた。

さあダイヤの豹をクロバーの祖母と

エジプトの神々を盲目の予言者たちと

頑強な鉤爪を抜け目ない手と交換しよう、

わたしたちがいつしよに巻いた日々の小さな太陽、毛糸玉の

秘密の糸端を見つけ出すまで。

過ちと罫にもかかわらず

今回わたしたちはゲームに勝ったのだ。

II

おまえはわが家の敷居にいなかった

わたしは郷愁が鍛冶する穴を、

挫折の物質でできた子どもたちや動物を予言する穴を埋めようとおまえを探しに出はしなかった。

おまえはひとあしひとあし空中を抜けてきた、

二月の光り輝くぼろ布で覆い隠された狼たちの巣穴

のうえを漂う板をゆくちいさな綱渡り師よ。

おまえは目もくらむような透明さから出てすこしずつ形をとりながらやってきていた

おまえの電撃的な覆いの先触れとして

裏返しの幽霊のようないくつもの体を試しに着てみながら

—霧の雲丹

火のように燃え輝く悪漢たちが持つ球体

致死性の食物を吸収する磁石

振動のそば

熾おきのまわりで回転と停止をくりかえす羽根つきの突風—。

おまえはすでにこの世に現れたことがあった

誰にも触れられない無原罪の黒に頭から尾まで包まれ

チェシヤ猫①よりも驚異に満ち

歯のあいだに輝く赤真珠のようなおまえの命の秘薬を銜えて。

III

おまえは拒絶された仔ではなかったとわたしは考えたい  
流浪の雄猫と囚われの雌猫の子よ

— 困窮したつがいだった、だが一度の性交で子をなした法の勝利者でもあった  
屋根裏で君臨する晩年のマルサスめいた布告に従順だった—  
おまえは狩りの獲物でも、岩の上から気まぐれに放擲された

残りものでもなかったとわたしは信じていることができる

そしてわたしも、その飛翔またの名を墜落を奇蹟の網で止める織り手ではなかったと。

慈悲に神意に愚かさにもさるなにかが

わたしたちの不倒の天幕を虫食いだらけの土台のうえに建てた

わたしたちは一皿のミルクと骨のあいだでなにかを知り始めた、

その骨といえはあまりに固く、歯を立てるのも難しい消失の骨だった。

IV

おまえはその放浪の時代からの逃亡者だったという

その時代、悪魔たちは神々の威光を笠に着て

無垢な被造物のなかにかれの熾の科学を隠している。

暗色の彗星はいくどかそれを告発した

おまえの鉤爪から眼差しまでを疾走するあの赤く燃えさかる脅威が

逃亡のなか、しなやかで柔軟な滞在のように

それとも根絶の誘惑のもとで今にも飛び跳ねようとするバネのようにおまえの毛皮を引きのばす

いっぽうおまえは、知識と沈黙が契約を結ぶ  
はるかな地からの使者であり

羽毛襟巻きのように郷愁を引きずりながらめぐる世紀を縦断する

おまえの秘密の存在はそれをすで見届けていた

それは智慧の雲に向けた熟視に包まれ

おまえの目のなかに黄金の雨のようにぶら下がり

思い出よりも此方こなた、忘却よりも彼方にあつた。

しかしおまえは一体なものだったのか、今になる前には？

## V

おまえはブバステイス(iv)で統治した

ナイル川のように大地を踏みしめて。

天にいるおまえの分身には髪(v)の星座が捧げられていた。

おまえは太陽神の娘だった。夜の悪漢と戦っていた

―泥濘、裏切り、それともモグラ、住まいの壁と愛のしとねを齧るもの―

寶石で飾られた石の王朝から台所の灰かぶりのスパイスまで

神殿の光輪から圧力鍋の蒸気に至るまで

増殖しながら。

孤独なスフィンクスそれとも家畜化された女予言者

おまえは家の守護女神だった、おまえのえも言われぬ解剖学的構造の茂みひとつひとつに髪(vi)の一枚一枚に

不眠症のシラミのような一柱の神を宿していた。

おまえはイシスとオシリス(vi)の耳を通して

自分の名がバステト・バスト<sup>(註)</sup>・そしておまえだけが知るもうひとつの名だと知った  
(それとも猫というものは二つの名を持つてはならないのか?)

しかし憤激が虫害の見舞われた蜜蜂の巣のようにおまえの心臓を食んだときには  
ライオンの眷属の域にまで膨れあがった

そんなときのお前はセクメト<sup>(註)</sup>、復讐者という名になった。

しかし神々もまた、不死の存在となるため、

いつの日にか塵と残骸にふたたび火をともしために死ぬのだ。

おまえの鈴が転がっても音色は風にかき消された。

おまえの袋は砂の無数の口に分散した。

そしておまえの楯型紋章は小トカゲとムカデのための混乱した偶像になった。

おまえの荒れ果てた墳墓で幾世紀もの年月がおまえを包んだ

—子どもの見る悪夢のなかを歩く、包帯を巻かれたあの街—、

ひとつひとつの体は一柱の神の巨大な石棺の一部に過ぎないから

おまえはかろうじておのれを保っていた、未決のなかに座る大隊であった。

ただ座っていた。

座ってずっと敷居を見張っているあのおまえの顔をしていた。

## VI

おまえは忘却の蓮からは食べなかった

—ホメロスの<sup>(註)</sup>な神々の特権—

というのもおまえはすでに知っていたからだ、忘れる者は気を失ったものになり

—引き波のなか以上になにもなく、もしくはほかはすべてただ流されていく—

ほかのさまざまな記憶の気まぐれな海に遊ばれ流れていくと。

おまえはある日、凍える影を収める倉庫で前足で搔いた

そして散らばっていた小骨

雨の味に恋い焦がれる織り物

女王蜂のための超自然的な蜂の巣のように甘美なはらわた

月のステップ地帯にあつて狼だつた歯

香を焚きしめたセルバでは虎だつた鉤爪をやわらかな鞞帯でふたたび結びあわせた。

それからその星のように散りばめた石灰の袋にまるごと包み入れた。

それをおまえは進行中の列車に向けるのと同じようにこちらへ投げた。

袋はどこかにひとつ穴を開けた。その穴を通しておまえを吸いこみ

おまえが戻るべき場所でもある穴を。

## VII

記憶者よ、おまえはあのにしえの秘蹟のしるしを

手つかずで口蓋のしたにとっておくのだね。

選ばれし者の印、おまえの暗い満月

おまえの聖なる血統を洗礼するのに使われた黒い甲虫の黒い塩、

それをおまえは巡礼から巡礼へのあいだにも疑う余地なく身につけている。

その標語はなんのためなのか？

おまえはここに何を残した？ どんな所有物を？

どんな千年越しの過ちを正すため戻つたというのか？

そしていまおまえはあのかつて見た者たちと同じように、後ろ向きに歩いて到着する

流浪の翼を負い離れていくいくつもの扉へと、あとずさりしながら到着する。

つなごうとする見えない手がおまえを驚かすかもしれない

それとも、一度は見つけたと信じたもうひとつの手のこの空虚な写しがおまえを怖がらせるかも。

おまえは皿をひっくりかえし、帰ってきたやつらのように無言で続ける

人生とはさるぐつわを噛まされた不在だと知っているやつらのように。

そして沈黙

忘却を装って縫いつけられたひとつの口よ。

## VIII

さておまえはこの比類なき櫃のなかでなにになったというのか

「わたしでわが種族は滅びる」ともある場所では？

おまえの本能のジャングルに畳みこまれた

差し迫った跳躍はこんなにも自然に似ている。

実りを迎えた穀物畑の雌猫、

穀物の最後の精神に至るまで挽く

太陽の暗い至の車輪にとらわれし者よ？

塵が扉をふさぎ門を固定している

黒い住処へと太陽が逃げたことで吹き飛ばされた

不妊のベルセフォネーよ。

それがおまえの裏面だったなら

なぜおまえは春の屋根へと正面から身を投げなかったのか？

おまえを救けようとする松明はひとつとしてなかった

後代におまえを分けようととりなす火花もなかった

おまえは一度、目のない白いさいころで

冒険のはじまりと終わりをプレーしただけだ。

おまえは不運にもあの手足を切断された雄猫を引き当てた

それは夜な夜なおまえの夢の排水管を落ちていきその過程で腐っていった

そしておまえは知らないうちに、その雄猫とふたりきりである発情期の夜明けを迎えた。

―憤激する蜂の群れ、轟くヴァイブレーション―、

おまえはあいまいな骨に、

読み解き不可能な魚の頭部に、

種の不可解な歩廊に尋ねるが徒労に終わる

ひよっとしてそのなかに棘と答えがありはしないか、

ひよっとしてそれらが知っていたのではないかと。

## IX

だが跳ねろ、芥子のあいだをもう一度跳ねろ

まるで前から知っていたかのように、

六月のかがり火(さ)のうえを、体を焦がさずに。

半開きのおまえの影からもういちど陽光あふれる場に顔を出せ、

たとえ引きずる霧のように

透明な蜘蛛の侵入のように

わたしたちが魔女とその使い魔であるという疑いを蒔くだけだとしても。

二頭の黄色い犬はおまえの足跡を嘗めはしないだろう

おまえは棘の生えた雲でブロッケン(4)の宴(4)に飛んで行きはしないだろう

わたしたちが夢の底にもついていたのは宵祭りが警戒するフクロウだけだった

子鬼たちをはらい飛ばす冷たい突風以外にしもべカエルも持たなかった

わたしたちと悪魔の呪われた同盟は

家の下に罨を掘っていつかまえられない

齧齒動物に対抗する恐怖の力だった。

わたしたちの悪魔的なしるしは

布に覆われた夜の意図をあそこへと追いやるための

瞳のなかのあのおなじ厚かましきだった。

わたしたちの血の盟約は

解くことのできない謎の交換にはかならなかった

われわれ自身が他者だったのだ。

## X

そう、おまえ、祭礼の嘆願書と怠惰にまきついた別の毛皮を纏い

魔法の靴型を持つもうひとりのわたし自身よ。

呪物ではない、乾かすためにその場に置かれたイナゴの羽根をもつ精神がきしみをあげる場ではない

自身の暗闇の舐先でガーゼに覆われた別の星のような呪符ではない

めぐりあわせの暗い苗床を吹き飛ばすためのお守りでもない。

猫という動物の役を果たす猫ではない。

おまえはおまえだ、わたしの血族のちぎれた鎖のなかで生々しく息づくトーテムよ。

燃えさかる秘密の交換としてのその絆！

いつもどんな距離にあっても

悪のしるし・善のしるしを吹き込む相互的なその息吹！

すべての運命の封蠟と印章のもとにつながれたその運

もしやおまえは沈思するわたしの魂を、おまえの七つの命の青い水上の竜巻として見守っていたのではないか？

わたしの内的宇宙にかかった夜の虹に似た

おまえの七つの命をわたしは見張ってはいなかったのか？

そしてこの物音そのごぼごぼいう音

土中に埋められた泡のかすかなこの水音

そしておまえの血の迷宮のあいだに吊るされたマルハナバチのしわがれた羽音は

わたしのもっとも秘されたマントラと言ってはならないおまえの名と

回復するときには創造の白い羽根をもって回復する失われたことばなのではないか？

## XI

どんな神秘のアルファベットでおまえは象徴を読み解くことを学んだのか？

退屈の濠でゆがんだ知らせを取り巻き

それから稲妻の一撃でえぐることを

どんな英雄の寓話がおまえに教えてくれたのか？

おまえの力は距離の力だった

一撃でその扇を閉じ侵入者を放逐した。

長の年月のような時間はランプのように警戒し

往来する滞在客の前に置かれた彫刻のように辛抱強かった。

おまえは身じろぎせず、黄金の温室に潜み

盲目のマルハナバチの虹色の音楽が突然全コスモスをつんざいて響きながら  
たったひとつの爪立てでその脅すような機械設備をまるごと破裂させるため  
太陽とその光輪の共謀にふちどられた昏睡状態の幻視のなかで  
ヒヨウの一閃で敵の一翼を待ち伏せしていた。

そうやっておまえはある日、空間を畳むことに成功した

そしてわたしのこころの底に、外部から侵入した影がほかの影に紛れているのを発見した  
それとも蜘蛛の巣がわたしの織り物をほどきながら織っていたのかを察したのかもしれない  
不吉な鉞脈がわたしの肌のでこぼれで矯めがたい大理石を鍛えていたのかもしれない。

おまえは前肢で掻いた。肉球と爪で掻いて悪を引きずり出すと

それは塵にほどける黒真珠のように  
無になった。

さて今わたしはおまえに問う、わたしたちのあいだは  
ほんとうに無だったのか？

それともおまえはあのうす暗い珠ひとつひとつ大切に抱いており

おまえののどの周りに結んだ首輪に糸を通したのか？

## XII

猫は死んだ犬の半分の価値もないという奴がいるなど！

わたしはおまえが見守ってくれたと、

わたしの枕頭で魔力的な癒しをくれたと確かに知っている

確実に治癒する白刃をたずさえた治療者よ。

うつろいやすい魂の時期に隠顕インクで書きこまれた

わたしたちの暗号を計策するおまえの沈黙をたしかに。

風に散らばるしるしの翻訳者よ

予言と秘密それとおなじおまえの言語をたしかに。

かなわぬ神託の通訳よ

こわれた石碑のように崩れおちる扉の正面にあるおまえの忍耐をたしかに。

夜の深い墳墓のなかでミサを司式する者よ

夜を掘り夜の獲物と罟を発見するおまえの智慧をたしかに。

内的飛翔に没頭する幻視者よ

すべてのたくらみの逆を張り見開いたおまえの閉じた目をたしかに。

天使たちが虫で編む網にとらわれし者よ

音楽の魔術にかかった深遠のようなおまえの耳をたしかに。

待ち伏せる泡のすべりを愛する者よ

九月の野草に似たおまえの柔らかい巻き毛と愛撫をたしかに。

瞬間の海を漂う砦の王女よ

おまえの所有物と他者の王国の境界をたどるおまえの尾をたしかに。

蜃気楼と罅と暗闇に勝利する者よ

何レグアも離れたところを歩くわたしの足どりをかきあてるおまえの嗅覚をたしかに。

この十五年の光輝くめぐりのなかのあまたの変化の同伴者よ

おかしい状況にあるわたしに恥をかかせまいと二本足で近づくおまえのやり方をたしかに。

動物の競り市では、わたしはおまえのために証言はしない

おまえは単なるよそものとして扱われるだろう

わたしは他の星々の謎めいたつむじ風に結ばれたおまえの血脈に賭ける。

XIII

沈黙がおりた。

洪水を前にしたコウモリのもののようにひろがった熾烈な膜組織

否定のガラスのようなその歌声。

おまえの口はもううまく息をつくことができない。

宿命のアーモンドを閉じるには適さないカプセルの半分と同じように

顎もはずれた。

舌はうすくらがりのなかに隠遁したサハラ。

目はものごとや顔の無益な等式を問い詰めたりしない。

黄色いスパンコールでこの世の儂い手本を模倣するのはやめた。

いまは最後までオパールの井戸がせいぜい。時はそこで溺れる。

おまえの体は、肉体をかき消し涙の経帷子で包む光以外の重みもない

誰のものでもない堅牢な鎧。

爪は繋いでおけない救済からはずれ

考えもおよばぬ裏面を引き裂きながら歩きまわる

無限の大移住の索具の最後の和音。

おまえの毛皮は日々のドアマットを通過する火の消えた炭の染み。

おまえの死は引き抜かれる乳香樹がたてるちいさな音に過ぎず

その後もう、おまえはいなかった。

昼がおまえを放擲した。

鉾澤のように対岸へとおまえを放りだした

名前のない、音もたてない、不可思議にも貫き通せないテーブルのしたに。

そこではよるべない塵芥のそばで

日の沈むほうへと転がる家の無様な在庫調べが

揺れて落ちて

雲へと変わる。

## XIV

言い表せない獣たちにまぎれた奇妙で激烈な物体のように

おまえは台所の料理器具のあいだでかくれんぼをして遊んでいた。

それとも、午後のとばりのしたで眠るドルイド(呪師)のマントを使い

複雑に重なりあう群衆のあいだに消えようとしていたかもしれない。

それともおまえは、自立し歩いていく紙の下敷きになった硬直した物質だったか。

おまえはいのちに脈打つ器官をタンスいっぱい詰めてこみ

首を撥ねられた被造物と亡霊と一緒に空虚なドレスに住み着いていた。

おまえは鳥だったコオロギだった、盲目の苔、放浪のトパーズだった。

いまのわたしにはわかる、あのとさおまえははかない仮面を使って追跡者をまこうとしていたのだと。

野うさぎの耳をもったトンネルも

目には見えない夜の蝶を狩ったというのも嘘ではなかった。

たんにわたしが、おまえの痕跡を砂で隠してやることを知らなかっただけなのだ。

おまえの敵はすこしずつ追いついてきて

雨を含んだぼろきれの変装であるそいつの布でおまえをくるんでしまった。

おまえは不可逆的な非在のゲームを勝ち抜いた。

だが今にいたっても、わたしは背中に冷たいガラスをすべらせる息づかいを感じる。

あの花々のあいだで震え輝く昆虫

ちいさなものたちの説明不能な遁走曲

夜な夜な窓に押しつけた影の鼻づら、

わたしにはわからないがそうかもしれない、

誰かわたしにそうだといってくれないか、おまえはつかまえてほしいからいる振りをして遊んでいたのではないと？

## XV

かずかずの偽りの姿！ 感覚という間違った迷宮！

複数で小規模の現実を名づけようとしても移すことのできないアナグラム！

体は翻訳の存在しないおのれのバベルに生まれつきひとりずつ閉じ込められている。

おまえもまた、たぐいまれな地平線のまんなかにあつて小さくかつ途方もないものだった。

おまえはどんな幻視をしたのか？

庭園は夜はイグアナが放つ燐光のあくびは青かったか？

わたしの靴は渡り鳥の飛翔ほどの高さだったか？

広場は海へと続く秘密のプラットフォームと通じていたか？

おまえが聞いていた音楽は白いあけほので

森で迷子になった子どもたちの楽園の火事に似ていたか？

それとも風の口のなかに香料を焚きしめた宇宙のすすり泣きだったのか？

生きて脈打つスポンジと尽きないパンがおまえの息吹を飲んだのか？

家具ひとつひとつに鉱物的なとらわれびとがいて、かれらの骨はもう一度生きたいときしみをあげていたか？

ひとつひとつの物体が信じがたい偶像で、夜明けからすぐ

輝く油一匙を捧げ物に要求したのか？

おまえはタマネギのなかに月を、鏡のなかに嵐をかき分けていたか？

おまえとわたしの間には透明で広大な宇宙が育っていたか？

世界はくるみのなかで開かれた酔宴だったか？

それとも最後まで連続した球体を内包する暗い球体だったか？

そこでおまえはおのれの孤独のため、天国のような球体が育つのを夢見ていたか？

くだらない質問だらけだ！

そんな問いはセルバのアルファベットのなかのおまえの菌形のように刻まれる。

答えは失われる。思い出のパンテオンのなかのおまえの綿の足どりのように。

## XVI

ネズミのミイラがいる楽園をおまえのために創ったりはしないよ

屋根裏の最後の冬の化石のようにおまえの骨とは関わりがないから。

馬鹿らしい変化も黄金の伝説の無為な鏡も創らない。

おまえは自分自身であることを望むだろうとわかっている。

二、三の記憶と

数奇なめぐりあわせに満ちた風の年代記に保存されたなかなかの傑物たる主人公だ。

しかしおまえを、手足もがれたこの世の写しに放置することもわたしにはできない。

過去の亡霊的なあらましを一包みにして持ち歩く移民のように

無防備ですでに超自然のおまえの持ち物

―ボウル、クッション、かごそして皿―をたずさえ

そこでわたしを待つてくれるとしてもだ。

もしも盲目になったなら、素朴な花のようにこの本のみじめな余白のあいだに

折りこまれたなら、意味を失い青ざめたしるしのようになったなら

おまえはなんと貧しい牢獄を選ぶことか。

おまえを探せるほかの天はあちらにはないのか？

おまえのように解きあかしえない創造物を

おまえのように種族が帯びる暗い象形文字の絆にとらわれたものたちを住まわせるために  
かれら、長く見通すまなざしの紳士たち

キップリング<sup>(四)</sup>、マラルメ<sup>(四)</sup>、キャロル<sup>(五)</sup>、エリオット<sup>(五)</sup>それともボードレール<sup>(五)</sup>

偉人たちが打ち立てた透明の紙の基礎のうえにたつ、

そんな場所は、光に満ちた魔法の版画はないのだろうか。

われわれが持ちえたほんのわずかな幸福の瞬間を材料に聖遺物入れに刺繍し

根絶が増殖する庭の雑草を引き抜きながら

分かれた物質がふたたび合一する鍋をかきまぜている

ウーリーラベンダーの手と蜂蜜の頬をしたやさしい祖母はいないのか？

わたしはおまえをその安らぎへと送ろう。

けれどおまえのため、誘惑に満ちた定期市に椅子一脚を要求しよう。

名譽ある玉座は不要

屋外に簡素な椅子があればいい。愛に向かって飛び跳ねることができるよう。

さまよう深淵のようにおのれの疑いを転がすあの偉大な冒険よ。

不確かで生きてはいない楽園よ。

## XVII

明け方のろうそくのようにわたしたちの痕跡すべてがかき消されるとしても

おまえが白の女王(白)のように、過去をふりかえることができなくても  
わたしのため空气中に笑みを浮かべておいておくれ。

いまのおまえはわたしのすべての死者たちのように巨大で

夜ごと度はずれた別れの夜をおまえの毛皮で覆うのかもしれない。

片目はアケルナル(冥)もう片方はシリウス(冥)にあり

両耳は地球外惑星の耳をつんざく壁にはりつけて

腕をまわしきれないほどのおまえの体はその沸騰する沐浴、

星のヨルダン川に浸かっている。

わたしの頭は無理かもしれない。わたしの声は空白ですらなく、

わたしのことは滑稽な言語のぼろ布にも及ばないのかもしれない。

けれどもわたしのため空气中に笑みを浮かべておいておくれ。

この不在のクリスタルの一かけらを窒息させるような微細な振動

片隅には燃えさかる炎に包まれる刺青されたちいさな見張り

このきびしい雪のカレンダーのページにひとつひとつ穴を開けるやさしいしるしを。

わたしのため空气中に笑みを浮かべておいておくれ。

不滅の守護者のやりかたで。

ベレニセ。

註

- (i) アルゼンチンの詩人オルガ・オロスロ Orozco, Olga (1920-99) が一九七七年に出版した詩集 *Cantos a Berenice* の全訳である。底本として Olga Orozco : *Poesía completa* (Buenos Aires: Adriana Hidalgo Editores, 2012) を用いた。
- (ii) チェシヤ猫 イギリスの作家ルイス・キャロル Carroll, Lewis (1832-1898) が一八六五年に出版した小説『不思議の国のアリス』に登場する、不思議な力を持つ猫。
- (iii) マルサス Malthus, Thomas Robert (1766-1834) イギリスの経済学者。一七九八年に初版を刊行した名著『人口論』では、人口過剰による食料不足への対応のひとつに、道徳的抑制の必要性をあげた。
- (iv) プバステイス エジプトのナイルデルタ地帯にあった古代都市。現在のテルバスタ。
- (v) 髪の毛の星座 髪(かみのけ)座をさす。エジプト王妃ベレニセ(スペイン語ではベレニセ、この詩集を捧げられたオロスロの愛猫の名でもある)が夫である王の戦勝を祈願して祭壇に捧げた髪に見立てる。
- (vi) イシスとオシリス 古代エジプトの主神で、イシス女神はその妻。
- (vii) バステト・バスト バステト、またはバストは、プバステイス(前出)の守護神とされた、猫またはライオンの頭部をもつ古代エジプトの女神。のちに雌猫のかたちをとるようになった。
- (viii) セクメト 雌ライオンの頭部を持つ古代エジプトの女神で、強力な戦神。
- (ix) ホメロスのな 古代ギリシアには、蓮を食べると記憶を失うという伝説があった。ホメロスの『オデュッセイア』第九歌にある、蓮を食べたオデュッセウスの部下たちが故郷を忘れるエピソードへの言及。
- (x) 六月のかがり火 六月二十四日の洗礼者ヨハネ(スペイン語ではサン・ファン)祭りの夜、大きなたき火を焚いてまわりで歌い踊り、その火のうえを飛び越す風習がある。
- (xi) プロッケンの宴 春になると、ドイツのハルツ地方にある山プロッケンに魔女たちが集い饗宴を催すとされていた。
- (xii) ドルイド 古代ケルトの宗教、ドルイド教の祭司。ドルイド教は動植物などの自然神を信じ、樅の木を森を祭礼の場とした。
- (xiii) キップリング Kipling, Rudyard (1865-1936) イギリスの小説家、詩人。猫に関する著作として、一九〇二年出版の『なぜなぜ物語』収録「猫が気ままに歩くわけ」などがある。
- (xiv) マラルメ フランスの詩人。女に去られてからは猫を伴侶として長い年月を過ごした、とうとう詩「秋の嘆き」がある。
- (xv) キャロル 前出のルイス・キャロルを指す。
- (xvi) エリオット Eliot, Thomas Stearns (1888-1965) イギリスの詩人・劇作家・批評家。ミュージカル『キャッツ』の原作『キャッツーボッサムおじさんの猫とつきあう方法』を書いた。
- (xvii) ボードレー Baudelaire, Charles (1821-1867) フランスの詩人。一八五七年出版の詩集『悪の華』には、猫をうたった詩が三篇おさめられている。
- (xviii) 白の女王 一八七一年にルイス・キャロルが出版した『鏡の国のアリス』の登場人物。前向きな記憶を持ち、未来に起きたことをよく覚えていと語る。
- (xix) アケルナル 一等星、エリダヌス座のα。エリダヌスはギリシアの川の神の名で、アケルナルは「川の端」という意味を持つ。
- (xx) シリウス 一等星、おおいぬ座のα。太陽をのぞき全天でもっとも明るい恒星。